

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0971000328		
法人名	社会福祉法人邦友会		
事業所名	おおたわらマロニエホームユニットI およびII		
所在地	栃木県大田原市北金丸2600-8		
自己評価作成日	平成26年9月28日	評価結果市町村受理日	平成27年2月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成26年10月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

マロニエホームでは看護職が配置された事により、ケアに加え医療面での支援が充実してきました。日々の健康管理や将来予測される健康面でのリスクを早期に把握し、その方に合った支援を家族と考える機会を増やしています。また、関連施設にはリハビリの専門職が居るので、本人の残存能力を確認し職員が適切なケアを実施することでグループホームでの自立した生活の継続につなげる事が出来ています。さらには、厚生労働省の定める認知症介護実践研修へ毎年職員が参加し専門知識を持って認知症ケアを行えるチーム作りにも力を入れています。認知症高齢者の抱える行動・心理症状が穏やかになるように日頃から話し合う機会を設け、お一人お一人が安心して暮らせる施設作りを行っています。暮らしが楽しいものとなるように、毎月の行事を充実させています。外食に出かけたりドライブしたり、運動会やお団子作り、畑での野菜作りなど誰もが活躍できる場を作り、入居者様が笑顔になってくれるように職員も一緒に楽しんでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

マロニエホームは国際医療福祉大学構内の1階にデイサービスやデイケア等が併設されている総合在宅ケアセンターの建物の2階部分にある。食堂を兼ねたリビングルームの外には植え込みやちよつとした畑も作られている広いベランダがあり、ホームが2階にあることを感じさせない。大学にある医療機関との連携が図れることや学生ボランティアが常に出入りすること、大学構内を安全に散歩できることなど、立地の優位性を活かした取り組みが可能となっている。構内には特別養護老人ホームほかの福祉施設もあり、職員は異動することもあるが、ホームでは開設以来極力異動をさせないようにして入居者とのなじみの関係の維持と職員のチームワークの向上に努めている。基本理念として「人格と尊厳の保障」「その人らしさの尊重」「愛情のある温かい介護」「地域との交流による豊かな人間性の醸成」「安全な生活環境の整備」を掲げ、その人らしさを活かした支援を心がけており、2つのユニットを自由に行き来する入居者の姿や職員の穏やかな対応が印象的なホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事務所内に理念を掲示いつでも見る事ができ、毎朝唱和する事で理念の共有の機会としている。入居者が地域の中で暮らしていくことの重要性をケアカンファレンスなどで話し合いながら、地域交流に努めている。	法人が策定した「基本理念」とホームの「運営理念」「スタッフ心得」を掲げ、職員は日々これらを振り返り、入居者の支援の礎としている。職員は認知症の専門的な研修を順次受けており、チームワークで支援に当たることで認知症の緩和が図れ、家庭に帰ることが出来るようになった入居者もいる。基本理念に掲げる「その人らしさの尊重」に向けて、意向の把握やきめ細かな生活観察によって、的確な支援が可能となっている。	充実した支援のために、今年度は与葉マニュアルなど15種類あるマニュアルの見直しを職員が手分けをして進めている。職員参加による実態に即したマニュアルの改訂は大いに評価でき、また、年度の目標を持ってホームの運営に当たることによって、運営やサービスの質のさらなる向上が期待できる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会へ加わり、地域行事へ参加出来るようになった。地域ボランティアとも馴染みの関係が築けており、毎回の来訪を楽しみにしている。全ての入居者が地域交流出来ているとは言い難い現状ではあるがこれからも継続したい。	大学の立地する金田北地区自治会に加入し、回覧等も回ってくるので、地域情報を把握してイベントに出かけたりしている。近くに「道の駅」があり、つい最近もフナッシーを見に出かけ、入居者は大いに楽しんだ様子であった。ホームが大学構内にあり、地域から見ればご近所という感覚を持ちにくい状態であるが、定期的に来てくれるボランティアもおり、入居者の楽しみとなっている。	ホームとしては、今後独自のイベントを実施して近所の人に来てもらい、ホームのことをもっと知ってもらいたいと考えている。是非取り組んでいただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人職員を対象に認知症をテーマに勉強会を行わせて頂いた。また、キャラバンメイトとして地域包括支援センター職員と共に小学生対象の認知症サポーター養成講座の講師として活動している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の開催時に参加する事が難しいご家族からも、日頃から事業所の運営やケアについての心配事、要望をお聞きし、会議の場で活かす努力をしている。	利用者、家族、自治会長、民生委員、市担当職員、地域包括支援センター職員が、運営推進会議のメンバーである。ホームの運営の説明や質疑応答が主な内容になっているが、ホームのベランダに迷い込んでいた高齢者が入居したことが取り上げられた際には、自治会長から自治会においても普段から高齢者の見守りが必要であるとの意向が示された。前回の外部評価の際、懸案となっていた会議議事録の職員回覧については、2週間以内の回覧実施が決められ、実行されている。	ホームとしては運営推進会議のあり方について、年度初めに毎回のテーマを設定するなどしてより充実した会議にしたいと考えている。ぜひ検討いただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市職員との連絡は2ヶ月に1度開催している運営推進会議が主であるが、介護保険関係の分からない事や、改正されたことなどを電話で質問し、支援に役立てている。	市担当職員は運営推進会議に毎回参加しており、市とは相談にのってもらえる関係が築けている。他市在住の高齢者がホームを利用する件やホームに迷い込んできた高齢者の支援や入居の件について相談したことで、入居が叶った例などがある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	利用者の権利擁護についての研修会を行い身体拘束をしないケアに取り組んでいる。日中は玄関の鍵を常に開けている。現在は家族からの希望もありエレベータに細工をしているが、本人が外へ出る機会を設けている。物理的な身体拘束だけでなく、言葉の抑制にも注意しながらケアを行っている。	徘徊傾向のある入居者が外出し遠くまで散歩に出てしまうことについて、家族とも話し合い、エレベーターの利用に手間取る方法をとって対応している。徘徊傾向やふらつきについては、本人の体調が関係していることを把握しており、事故の無いよう見守りをしっかりすることを心がけている。また、言葉による行動の制止も拘束であると理解して互いに気をつけている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法についての勉強会を施設内で行い、法令の概要を学んでいる。傷や痣を発見した場合は記録に残し、入居者様の様子などを観察している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社会福祉士の資格のある職員が権利擁護に関する知識を広めるため、自ら研修へ出席し、定期的に資料を作成し職員へ周知している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に家族若しくはご本人にも見学してもらい、施設で対応可能な事、ご家族の協力が必要な点を説明し、理解して頂いたうえで契約を交わしている。退居時は、本人の状況を踏まえた上で、必要なサービスを受けられる施設等に紹介を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	どの家族も月に1度は面会に来られるので運営についてや、ケアへの要望、心配事をこちらから聴くようにしている。本人からは日頃の会話の中で望む暮らしを傾聴しケアプランにも反映している。	毎月、ホームの様子を知らせるお便りを出して入居者の生活状況を家族に知らせている。本人や家族からの運営に関する意見や要望はほとんど無いが、入居者への対応の仕方については要望があることが多い。トイレの手すりの設置や睡眠剤を減らすこと、普段はペースト食を食べていても行事食の時は他の人と同じに普通食にしてほしいことなどの要望があり、事故にならないよう支援の仕方を工夫しながら対応し要望に応えることができている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	普段から気軽に話し合える関係作りに努めている。スタッフ会では、ケアでの困り事、業務の改善点などを話し合っている。上司が度々現場へ訪れ困っている事などを親身に話を聞いてくれる。	月一回のスタッフ会議やその他のミーティングを通して、支援について困っていることを話し合い、工夫を生み出し改善が図られている。最近も、ある入居者の緊急時に救急車を呼ぶタイミングについて検討し、マニュアルの変更を含む個別対応を取り決めた。また、急変時に必要があるためホーム専用のAEDが導入された。土・日の業務の一部を職員配置が余裕のある平日に移すことや、管理日誌の書き方、入居者の椅子の更新などが、職員の提案により改善されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	知識や技術向上の為、研修会を開催したり、資格取得に向けた研修や講習会へ参加出来るような環境作りや、勤務調整を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	経験年数に応じた研修計画が立案されている。対象となる職員が参加し法人外の研修も積極的に参加できるように、勤務調整や金銭面でのサポートもあり、個々のスキルアップができる職場である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	大田原市ケアマネージャー連絡協議会に参加し、研修会等で意見交換を行っている。 認知症介護実践リーダー研修の施設実習を受け入れ認知症ケアを行う同業者としての意見交換する機会としている		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人に見学へ来て頂き、本人が抱えている悩みや不安を理解するように努めている。また、自宅では難しいが、施設でできる事などを一緒に考えるようにしている。入居間もない期間は本人を見守り、本人の話に耳を傾けながら訴えを捉えるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の相談時には、現在家族が抱えている問題、介護力についての不安を十分理解できるように心掛け、家族との信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の相談には、十分な時間を設け、本人と家族の状況を把握している。家族の意見を考慮しつつ、本人に必要なサービスが利用できるように他事業所とも連携を図っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人や家族から得意な事、趣味や大切にしている思い出などの生活歴を伺い、ケアに活かしている。野菜作りや、料理など入居者様から教えてもらう場面を沢山作り、職員も入居者様から日々学んでいる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者様のケアについて積極的にご家族へ相談し支援に取り入れている。来訪した際には近況報告、支援経過を行い、これからの支援について家族の希望を聞いている。職員では難しい場面もあるので家族の力を借りることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の友人や知人が来訪した際には、温かく迎え、本人と楽しい時間が過ごせるように配慮している。また、行事外出では入居者様の意見を取り入れながら、馴染みのある場所へ行けるように計画をしている。	入居者の家族や親戚、友人が訪ねてくることも多く、なじみの美容室に出かけ、いつも食材を買いに行くスーパーでは顔を覚えてもらっている。自治会婦人部の方が傾聴ボランティアに来てくれたり、ボランティアサークルの学生が話し相手としてしばしば訪れるので、入居者にとって新しいなじみの関係が生まれている。会話の中に垣間見えている入居者の思いを捉えて、デパートに行ったり、那須神社にお参りに行ったり、道の駅に出かけたりしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様1人ひとりの性格や個性、相性を考慮し、入居者同士が関わりを持てるようにしている。一緒に作業をしながら支え合えるような関係作りの支援をしている。トラブルの際には職員が間に入り、関係性が崩れないように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了しても、施設の行事の案内を送付したり、本人の状況を伺ったり、地域で暮らす住民として継続的な付き合いができるように心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者様が自分の思いを伝えられるように質問の工夫をしている。家族からも自宅ですしていた事などを伺い、ホームでの生活に活かしている。献立の立案時には食べたい物を伺ったり、1日の日程を本人と考える努力をしている。	入居者との会話の中から行きたい場所や思いをくみ取り、支援に活かしている。バスに乗ってデパートに行きたいとの要望が聞き取れた時には、バスでは行けなかったが、デパートに行ったり、食材の買い出しにスーパーに出かけたりしている。刺し子が好きな入居者のために、布に下絵を描いて用意している。	職員は入居者のほぼ全員の意向や思いを聞き出しているということであり、今後とも一人ひとりの入居者の生きがいにつながるような支援を続けてほしい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者様のこれまでの生活歴や経験、大切な思い出を理解するよう本人や家族から話を聞き、出来るだけ継続出来るように支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居する前の1日の生活の流れ、時間の使い方を把握し、入居後も変わらない生活ができるように支援している。ケース記録や申し送りを活用し、生活リズム、体調の変化を職員は把握するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者様のケア担当職員とケアマネが共にプラン作成、モニタリングに参加し、日頃から家族や本人の意向確認に努めている。本人の希望が言葉で出ている時はそのまま活かせるようにしている。	それぞれの入居者に担当職員がいて、計画作成の際にケアマネージャーと相談して計画を立てている。その他にも全職員から一人ひとりの入居者について情報をや気づきを出してもらい、入居者の生活や支援の改善につながる別の視点が得られている。さらに、ホームの看護師や併設事業所の作業療法士や理学療法士、言語聴覚士からも助言をもらい計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別ファイルに健康状況、食事量、水分量、排泄回数、日々の暮らしの様子を記録に残し職員間で情報を共有している。記録は具体的に記入され、それを元にカンファレンスを行い介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	隣接された医療機関で急変時の対応が行える。また、早急な受診が必要な際に、家族の状況を考慮し、職員が付き添うなどの対応を行っている。入居者のニーズに合わせて、買い物外出の支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域住民によるボランティア、学生ボランティアの協力がある。毎月、地域の消防署の協力を得ながら消防訓練を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者様は入居前からのかかりつけ医に家族の付き添いで受診している。普段の様子、健康状態などが医師にも伝わりやすいように連絡表を持参してもらう。必要な医療の支援は看護師が行い、家族からも安心の声が寄せられている。	かかりつけ医への受診は約6割の方は隣のクリニックへ他の4割の方は市内の医療機関へ家族が付き添って受診している。主治医からは医療情報を書いた連絡票の返信をもらうようにして診療結果を把握しケアに活かしている。年2回入居者全員を対象とした健康診断があり、診断の結果、受診・治療が必要な場合は、看護師が医療的な説明を家族にすることで早期の受診につなげている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員として看護師が配属されているので入居者様の気づきや相談が行いやすい。また、ケアに必要な医学の視点や必要な情報を介護職へ提供し、健康管理、サービスの質向上に繋がっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者様が入院した際は情報提供書を病院へ提供している。また、退院の際は拡大カンファレンスへ参加し、退院後のケアに必要な情報を得るように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の指針を定め家族と相談している。日頃からご本人の健康面での相談を密に行い、急変が予測される入居者様については対応方法を定め実施できるようにしている。	重度化した場合の対応について、入居時に重要事項説明の中で事業所の方針を伝え、要介護3になった時にも確認している。重度化した場合ほとんどの方は特別養護老人ホームの入居を希望しており現在6名の方が申し込みをしている。大動脈瘤の所見のある方について、家族も交え話し合いを行い、その方専用の対応マニュアルを定め緊急時に備えている。	前回の目標達成計画の中で、終末期の看取りの対応について施設としての方針をまとめ明文化するという目標については、まだ取り組みが継続中である。今後もホームとして話し合いを重ね、方針をまとめ明文化していくことを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時の対応マニュアルを作成し、見やすい場所に備えている。応急手当や初期対応の研修に参加する等して、急変や事故発生に備えている。急変が考えられる方については個別の対応方法を決めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎月、日中や夜間を想定した防災訓練を行っている。隣接した施設の協力を得ることができる体制となっている。地域消防署の指導を受け、安全な避難誘導ができるように訓練している。	毎月ケアセンター全体で避難訓練が行われ、そのうちの2回は消防署立会による総合訓練が行われている。消防署員から逃げる時はドアを閉めることや、救助に入った時に車いす対応の入居者がすぐ解るように目じるしの様なものを付けるなど、具体的なアドバイスをもらい今後に活かしたいと考えている。備蓄品はセンター全体で3～4日分は賄えるよう用意されている。今年ホーム専用のAEDが設置され夜間帯でも緊急時には使用出来るようになった。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	名前の呼び方に気をつけている。その方の馴染みの呼ばれ方や、嫌な呼ばれ方をしないように配慮している。入浴・排せつの見守りの際のプライバシーの配慮、介助する際の本人の自尊心を気付けられないような声掛けをしている。	職員は入居者の名前を呼ぶときには常に敬う気持ちを持ち忘れず「さん」をつけて呼ぶようにしている。トイレへの誘導も耳元でそっと声をかけたり、リハビリパンツやパッドを取りに行く時も服の下に隠すなどして、他の入居者にわからないように配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事の献立を決める時や、余暇時間の過ごし方、入浴の時間など自分で決める事ができるように声掛けをしている。意思の表出が困難な場合は、選択肢を工夫したり、分かり易い言葉選びに気を付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居の初期に本人がこれまでしてきた生活スタイルを聞き、入居後も日課をその人のペースに合わせるようにしている。「今日は何をしますか？」と声を掛け、1人ひとりのしたいことの実現に心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴の際には本人と一緒に服を選び、好みの服を着る事が出来るように支援している。髪が伸びて生きた時は家族へ伝え、馴染みの美容室などへ行けるように相談している。ホームでも散髪のボランティアがあり、楽しみにしている入居者様もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は入居者の希望が反映するように一緒に考えている。麺類が苦手な方はご飯を提供するなど希望に添えるようにしている。誕生日の方には当日食べたい物や好きな献立になるようにしている。調理などそれぞれの出来る事を把握し、入居者様と職員と一緒に出来る機会を作っている。本人の能力に合わせた食事形態やメニューを考慮している。	献立は入居者の希望を聞きながら職員が考え、毎日スーパーで新鮮な食材を購入し調理している。肉・魚・野菜をバラエティー豊かに組み合わせ食欲をそそる彩豊かな食卓となっている。桜や紫陽花の開花時期にベランダでお花見弁当を食べたり、夏場に流しそうめんを楽しんだり、ぼたもちや釜の蓋饅頭、恵方巻き等を入居者と一緒に作るなどして楽しく食べられる様支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分や食事量は毎食毎に記録している。摂取量が少ない場合は栄養補助食品で代用している。本人の疾患、好みに応じた献立立案に努め、嚥下や口腔内の状況に応じた食形態での提供をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時、食後、就寝前には口腔ケアの声掛けを行い、本人の出来る方法で清潔を保てるようにしている。義歯使用の方は出来るだけ毎日義歯洗浄剤で消毒をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個人の排泄パターンを把握し、食事の前や後や随時、声掛けや誘導を行っている。トイレの場所が分かりやすいように目印を付けている。本人の能力を把握し、必要に応じたケアをしている。	排泄に関し自立している方は2つのユニットに4名程おり、その他はリハビリパンツやパッドを使用し、個々に合せた声掛けや誘導、介助等でトイレでの排泄を促し自立に向けた支援を行っている。手すりは付いているがトイレが広くて転倒する事故があった為、安全対策として簡易的に横手すりを取り付けた。今後正式に横手すりを設置する予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日排便の有無を確認し、繊維質の多い食材や乳製品を献立に取り入れている。自然排便を促すために水分補給の方法や体操、散歩などの軽い運動が日常で出来るようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	大まかな入浴時間は決まっているが、本人の希望や体調など状況に合わせて臨機応変に対応している。記憶障害があり、突然誘うと混乱してしまう方には予定表を渡している。夜間入浴も時々行っている。	入浴は主に午後、個浴で一回ごとにお湯を入れ替えて実施している。希望する場合は入浴剤を使用したり、季節のゆず湯や菖蒲湯なども行っている。たまにであるが夜間帯の入浴希望者には夜間入浴も行い喜ばれている。現在職員2人の介助によって入浴している方がおり、浴室の環境整備としてリフトまたは機械浴の導入が検討されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝具類は自宅で使用していたものを持って来て頂いている。寝る時間など以前の生活スタイルを把握しながら支援している。日中の活動を増やし、夜間十分な睡眠が取れるように支援している。また、高齢なので適度な昼寝をして頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ごとに薬の内容を記した表を作成している。また、看護師からは本人の疾患、内服薬の効果や副作用を記した表を作成してもらい全職員で共通理解できるように努めている。マニュアルを作成し安全に内服支援が出来るように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の以前の暮らしを踏まえ、ホームでの暮らし方について個別に考えている。家族の協力を得ながら、家庭の味を堪能する機会を設けたり、外食や買い物外出などの支援を行っている。手芸が好きな方もおいので作品展に出展したり、バザーに出したりもしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日の食材購入に入居者様を誘い、希望があれば本人の行きたいお店に行けるように対応している。本人の馴染みの場所を把握し、行事などの外出の機会に行けるように計画を立てている。出来るだけ散歩の機会を多くしたり、ベランダへ出る事が出来るように支援している。	天気の良い日は、限られた方ではあるが大学構内をよく散歩に出かけている。10月に行われた大学祭では、学生ボランティアが入居者にそれぞれ一人ずつ付いて思い思いの場所を見て回った。那須動物王国、那珂川水遊園、那珂川苑などに全員で外出したり、大学構内のレストランで外食をする機会を設けたりして戸外に出る機会を増やしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	各自がお小遣いを持っている。個人で管理したり、管理が難しい場合は施設の金庫で管理している。外出や買い物の際に希望を聞きながらお金を使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が電話をしたい時には自由に電話が出来るように支援している。携帯電話を所持する入居者様もおり、遠方の家族とも連絡が取りやすいように電話のかけ方など質問があった時などは対応している。友人に手紙を出している方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	1日の中で最も過ごすことの多いリビングは、居心地が良いように花を飾ったり、季節感のある装飾などで演出している。また、相席する入居者様同士の相性を考慮し、互いに気持ち良く過ごせるように気を配っている。	ユニット別の玄関があり、職員の顔写真入りで名前と顔がわかるように掲示されている。ユニット中央に中庭がありベランダ側もガラス張りとなっているため、より明るく開放的な作りになっている。広いリビングの中央には一段高い畳スペースがあり、掘りごたつが設えられている。壁には貼り絵や刺し子などの入居者の作品が掲示されており、こたつテーブルには入居者が交代で活けている花が飾られている。軒先でツバメが巣立った後、ベランダの畑にセキレイやスズメが餌をついばみに来ており、入居者の気持ちを和ませている。日当たりのよいフロアーでのんびりと過ごしたり、パズルに熱中する入居者の姿が見受けられた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	少人数用のソファや椅子などを配置したり、畳コーナー、掘りごたつなど自分の好きな場所で過ごせるように環境作りを行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際には馴染みの家具や小物などを持参し、自分らしい空間を作って頂きたいと家族へ話している。テレビや冷蔵庫を持ってきたり、個人差はあるが写真を飾ったり生活感が表れ、自分の居場所になるように支援している。	ベッド・洗面台・たんす・押入れは事業所の備え付けであり、入居者は布団やテレビ、冷蔵庫、衣装ケース等それぞれ必要な物を持ち込んでいる。誕生会の時の写真入りのプレゼントや自宅で可愛がっていた猫の写真飾っている入居者もおり、それぞれが居心地良く過ごせる様工夫している。居室の向きにもよるが窓からは大学構内の木々の新緑や桜、紅葉など四季折々の景色が見渡せるようになっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の居室や廊下には手すりを設け、入口には段差が無く安全な生活環境になっている。トイレと居室のドアが分かりやすいように装飾したり、表札を掛けたり工夫している。		